

西山先生を悼む

柴原 早苗
(放送通訳者)

西山千先生が亡くなられた。

アポロ月面着陸の同時通訳で知られる先生に、私が初めてお目にかかったのは今から 10 年前のことだ。

場所は松本道弘先生の私塾。かつて私は学生のころ、松本先生の主催する英語塾に通っていた。しばらくごぶさたしていたのだが、ロンドンの BBC ワールドで放送通訳者として働くことが決まり、ごあいさつも兼ねて久しぶりに出席したのである。その日のゲストが西山先生であった。

西山先生は松本先生にとって、アメリカ大使館勤務時代の師匠である。この日の塾では両先生、すなわち師弟による同時通訳デモが行われた。

今となっては記憶も定かでないが、おそらく松本先生が英語でスピーチされ、それを西山先生が日本語へ同時通訳なさったと思う。アポロの通訳についてはそのすばらしさを書物などで読んでいた。しかしご本人の通訳を前にして、私は大いなる衝撃を受けたのである。

なぜか。それはひとえに西山先生の通訳が美しかったからである。「あー」も「えー」もなく、流れるように言葉が口から出ている。当時、先生は年齢 80 代半ば。若い塾生たちを前に背筋をピンと伸ばし、目元はほほ笑みつつ、しかし、話者の魂に入り込もうと真剣に耳をそばだてていらした。

それまで私が通訳学校で習ったのは、「とにかく話し手の発言はすべて訳す」「一字一句たりとも訳漏れがあってはならない」というものだった。授業中、たった一言につまずいて次に進めず、訳語に詰まるということもしばしば。自分の記憶力のなさが情けなく、くやしかった。しかし一方で、そのころの私は「全訳」の中に美を見出すことができなかつたのも事実である。

目の前に繰り広げられる西山先生の通訳は、私が習ったメソッドとは異なっていた。ことばとにかく無駄がない。オリジナル・スピーカーがいなければ、先生ご本人のスピーチかと思わせるほどである。私には、まるで美しい旋律を奏でる音楽家のごとく、芸術的美学の集大成に見えた。

あれから 10 年。通訳学校で教える私は、歴代の通訳者について生徒に問うこと

がある。戦後日本の通訳界を切り開き、今、私たちがこうして働くことができる土台を作ってくださった方々の名前を挙げてみるのだ。しかし悲しいことに、若い受講生たちはその名をほとんど知らない。通訳学校の門をたたいて学びに来ているのに、黎明期の通訳者を知らないとはどういうことか。彼らにとって、戦後とはあまりにも過去のことなのか？ それともただ単に、パイオニアについて思いを馳せようという思考にならないからであろうか？

未来の通訳者を育てる私にとって、せめてできること。それは西山先生の、あの流れるような通訳を語りつぐと同時に、話者の心に入り、通訳を芸術作品になぞらえてできる限り美しいものとなるよう、伝えていくことだと思っている。

著者紹介：柴原 早苗 (SHIBAHARA Sanae) ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院修了。ロンドンのBBCワールドにて放送通訳業に従事。帰国後はCNN jを始め、放送通訳・会議通訳業務に携わる。現在、アルク「English Journal」でBBC Newsを監修。Email:shiba@kd6.so-net.ne.jp
